三拾石艜始

一

京 乙 5 390

別圖

5-3
4-2

国立国会図書館　タイトル『三十石艠始』 請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

三拾石艠始

一

京乙
5
390

別圖

国立国会図書館　タイトル『三十石艠始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

三十石艠始　第一齣

全本五巻
中村古逸蔵出
更太田南畝先生文庫
五巻一冊不足
七十翁蜀山先生補筆全備

帝國圖書館

大正
8.6.4
購求

国立国会図書館　タイトル『三十石艠始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

一 えんけの姫妹
縫之菊 帝松 一 小性浅之丞 かつま

一 〃 久米松 一 忠助亦を 吉三郎

一 〃 大蔵 一 くとう姉亀之丞 小伊三

一 〃 小吉 一 若党浅角 重兵衛

一 〃 中浪兵 一 鶴澄丞 三平

一 ひげや七之丞 菊弥 一 わに 小市 米助

一 彦九郎 一 昌書 岩五郎

一 やりて杉 文平 口上 一 与兵衛 次郎吉

一 五郎 惣人 一 諸門 浄存

一 侍　　　　大がん　一 石積中将　　楽蔵

一 男寺侍　　吉人　一 閑素領見　　大五郎

一 同　　　　吉人　一 龍寛法　　　新九郎

　　　　　　　　　一 淀旨主鳶　　浮右衛門

　　　　　　　　　一 兄ゑ母　　　長丹三

造り物三間の間は社檀一面の玉垣前に
さくら並木門より大鼓打琴弾白拍子の
津の浜よふ面白や淀み吉右衛門さくら松
並松大庭新九郎出来中津入唐子の
かりからく石段大鼓かくれにぶり出てかえ今高
中伊三郎り神して出すゑ出すしめ細すれ
出してのかして出る重兵衛廣子田寺津之助ろく
龍中郎ゑ経ろげ姫将大学にかりてしめ
出しまた大臣の二社の様子　わでて[illegible]

結構なごちそうに預る　ト

一 清盛のおいり

一 いざしお入なされませう

ト [illegible]

一 清盛は [illegible] で参りまする

一 [illegible] のうち [illegible]　ト [illegible]

一 清盛 [illegible] 姫 [illegible] ござんなんで参り

まする。

一 [illegible]

一 [illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible] 参りまする

一津守住吉山の歌よみには、むかしより人のうたはれし名
所の歌さへつまりての歌の香も命も御身に
足ならし牛の雑用まで人々の歌をよみて世上に思し
わする香は命のみは御運のはなは静く世上
国を出立つ事なれともこの御身に成来り給ひし
家の繁昌は子々まての神仏の加護と神慮にまかせて
身をもしく住吉の神に
一病気も日々あつしくあらはに快気する事は御運の
ひんかんほどもあとがくれとも命の長く見る事なく神慮なと
祈るにてもかなはず海ては水の事まで思ひ御守り仕て
ひとしく思召ありて祈りなし
一あだしき事に住居を見てば吉なりも中に事を祈るは御心の中
もちろん子らの病も神慮を祈りまれてはなりたまふ
一うきしき事は永き中にあるものの神慮を祈りまれと
此宿にかくかなるらしむ申しは習道の御存知可なせ
病気の後はあさしいかなりまれ
一此度のりうさく婚の縁は何れも先生にて
高砂を歌ひて祈祷を挑へむ事こそ大事な

急にじきじきさうでしゆつせうの
一〈与八〉御身の昼ハ二七日が百種の願ひ大宮へ勤め精出し
祈をかけ娘子が事を努めし肝の所を祈り揚げ
はしりまいす
一〈弥い〉ハイ、左様く
一〈梅十郎〉イヤ命ぼうし若屋の川来が志れても縫ひて置
閑ば御尋する初めの大事とけ早く此の神も納め
ごぜらうぞ こりや 世の中の事の一つの身の
御さんせよがつから
一〈金〉軍兵衛めの此綱の先し御ゆかし梅吉さまを
向ふしるべ一途にどうりすきバ此者が流れまい
一〈梅十〉素きの女の身で候へこんでいゆき
一〈金〉初年をどが娘まで菊中々の内かゝ思ひ成りまする
一〈梅十〉此ではきつめうりこるが此者が縁さへつかぬやうに
もとより縁ハ、梅吉郎さまへ川かりし様ときの
誠実の実は娘子が大事に思ひ成りつゞずが
一〈金〉そこもとがぬしの縁きれんで
よそる別き

国立国会図書館　タイトル『三十石盤始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艘始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石盤始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

呉一何の話じや是迄へめ

三十一ごまかされませんし　トそばゟ入る

呉一あのかんなは任せはなしておりじや

三十一かるもので ござんすものの

呉一まづくめんなら嫁まさる家に来ると 女郎ハ後口のほへ

それ成気く其の事ハ理屈でハ何でも叶ふ筈じや大

道人のがらせハ中々出てうかうか中々

ふんハ中々できぬぞ

三十味一アハゝ其りと志く居りを

市一こりやあの男めちやとお侍なるのがあらこゝへ

よしんでござると

呉一おれ様すずめでござりません

三十一ハゝゝ流石でござります

市一此男め様ハ夫様との

三十一ハゝ松がのでござる子今の国は地しとござる

市一御来でござりへござりませ

市一此男め其子ハ夜さり詰める途中にて出でこさめハ

それ様へ物ハ若者殿しじやる

三下
一支度出来ましたらハ
三中
一言ふ度毎の生路船でござんすさかい事
三下
一南無三ぼう ト ゆはんとする
三中
一それ支度支度をしてくれめも〳〵
三ウ
一まあ〳〵取あへずおきなされ
三中
一そのきつい事をなされますなおり
ませぬか 責めが来まするの無理な事成
のうぞ斯うござりますかへ しかし是非
なうとの支度ぞよう〳〵おいらでござりまする事

三下
一彼所に居る者こそ出来し〳〵 斯う〳〵しても
よい所へ参りましたが御酒が参りましたら
の事 此方へ入らずとも 御出なさるで
御用にも此所にて 私もどうぞ 下さりませ
三中
一切ても是非の取まして 何ぞ 取りでも〳〵して
また是非ともおもむいて 参りましても是非ござりま
せぬ
三下
一ササ ここへ
三中
一まあ〳〵ササ〳〵

国立国会図書館 タイトル『三十石艠始』 請求記号 寄別5-3-4-2
ガラス使用

一ぶそで御座ります
一拙者播州者じゃが此度江戸へ参る者
名をトうけ出れ者
一三左ハ
一四十八歳松蔵ハ生年江戸表を罷り出
尋ね来り中まで御座ります
あし取り所に居り申す
の其ハ又が存じ上げ候
足をつけて御座ります

一拙者存じ参らせ候
中なから船でも参り候
一御前ハ生年数年
でさをよろしく
お気ばん勤んで御座りまする
一こちら様御座ります
一ようすハ様子じゃ
一やア如何の志
一身どもハ
婚礼の

国立国会図書館　タイトル『三十石艠始』　請求記号　寄別5-3-4-2
ガラス使用

女と名がつくしまりがなうてハ武士の女房にハなりませぬ

（重）一それ上村殿が世へお入なされましたも浅香屋の恋

きん里の子を身ごもりしが母子ともにさぞ

るくここお家のおためで国が乱まするサアなんと

（三千）一徳姫のおさへ[illegible]まりで姫と母子[illegible]

お家国とおさめるための

（重）一まことやさよくきんでござりまするヽ

（帯）一それ嬉しうござりまする

（帯）一若菜[illegible]くんの[illegible]ハ此殺害の[illegible]

ト言ふとり○方敬

（源之丞）一女房よんでは川へかりのこと也

ト源之丞家来[illegible]水のかたの[illegible]帯を手桶

ともちでる

（重）一戸根殿ハ[illegible]河原で河原へお出

（源之丞）一河合でも[illegible]若菜[illegible]姫と[illegible]めすると

きんさまより[illegible]水[illegible]しよる

（三千）一まづ[illegible]庵[illegible]見よ[illegible]まするぞ

（源之丞）一それ[illegible]よりて[illegible]

（侍）一女房[illegible]川へかりのこと[illegible]

国立国会図書館　タイトル『三十石艘始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

妙な事を仰しやいるものじや御座りませぬ イヤ又姉さ
まうしして未来のお方の座へ御出なされまするし
（りま）一それはさうしたものの見物いよう〳〵其外いふ人は目もや
ゆるし船ゟしめて船子どもは見るものからものぢや船子
（さわ）一何の此ふかうすめでゝ五代菊之丞や愛しなれは
（市）一いやもう あまり物見て御座んすまる此方で汗が
出るわいの
（久右）一ほんに今宵の粧ひはうるはしく津々して御座んせ
（右）一私もゆふべ中から夜はあがりとして 扨て乗合汗を出しまする
まして御座ります
（宗）一扨の盃ほどるは舞も飛んが敵役去ん物足らふ
（浪之）一何事言ひ扨の事やがてなる事わいしめまする
[illegible]
南て今宵しも扨まして見へ出るし 乗合で
（宗）一扨の外は [illegible] 御の方 [illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『三十石艠始』　請求記号　寄別5-3-4-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艘始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

若わら
一いやもう拙者も村岡浅野貝沼まくの意見
いたしますれど此様な親方より金子より外が所望と娘
先代より八中揆作明日の様子を成致さうと如てむるま
せん
要人
一所ハ奉でござる通りのごとで御座つて大事じや家
言悪法若のう渡世とは申さぬ作の上ハ人よ長申
でござらふとものよ
新九
一左様ならさぞ安り申
たつよ
一ちりやもう日頃から申すじやが大ゆの事ハよそうと成
一せうし拙者がまずで云ん志ぐだいぶとかとは思ふ
休粉様がござるがそれいつもござらぬ今をさる
新九
一兎角由ともえ様よろしく御まじつかまつる
一拙者がこの許の所ら物事成切所し淀川へ流
まうと申す事親同前も小揆よと申す所へ生きて
思ふ御継来の第一と讃して云ん由へ出て継来の
作の支でござらうのよ
新九
一サア其義は対まする新家内の縁も動き甚
[illegible]嘆き申れ

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

よからう

市蔵 一コレ〳〵やい 皆やゝ 聞やしやう 兄のり

重 一いんでもらうぞうぞへ こゝい何まりみえて すんふ

申んぞへ

幸 一サア〳〵いんでく

中伊 一うまかんかつしや 皆さまをすハ いやじや〳〵 申ておる

ト拾る

重 一いやおくまい

三千 一家ゞまさ 何で せき申す

重 一志らんこと申さんが

小 一コレ子が方ハコレ成

林 一二形さハ聞 ト四人何さふ申しとめる

孫 一二度へハ聞 何で知りませぬ

三千 一是ハ

孫 一何で知りませぬ

三千 一申ハおまり 狂言の趣向じや 御覧なされい

孫 一趣向おもしろがりましたの 志ばらく申しおかれて

新九 一是ハ何お座敷でも くるしうない ばかりを申さいなが

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石盤始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石盤始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

須三 一三十石もまひ様で御ざりまする。さんざん
須じゃ
大 一兵庫の飛脚と云ハ、よのものでも外の間からも
須 一外にござりますハ知恵者でござります
大 一アゝ申兄くトいたす
須 一左様ならく
大 一又でござる当法様が
新九 一わしの色ありまする。当法様にも似合てござりまする
一知恵兵の飛脚ながらでござりまするじゃ十人
大 一両国様方ござりまする
新九 一こゝの内から十人も出てござる
須 一うゝ主人当法様ハ御会所で御ざりまする
新 一為がゝる様をお出しが参じゃでござりまする
須 一又でござる中やうに様うぬすがら参りました
大 一ヤア
須 一折ゝ様にござりまするでござりまする
新 一わりました
一今ほどござりまするが様が[illegible]

大
一　ちぎりと金もし〇花名残に垣根より
昔の花の名残まで見てあはれなる哉

新
一　ツ稽古夕べより〆かへ〈花じや

大
一　子のある身にしむかしのあかつきよりで

清ミ
一　主人の所ではあるまいり

新九
一　男の身に朝から世にでるところ〱あれ
大名の家にさし出る

一　是非もなき身のほど〱　ト よむ

清ミ
一　そのころ女房のうきし身の實は今は人の身の上にきてまつ
りし女の身の後の縁の緑の紙かへすゝき
妹のことく手もたゝすゝき姉かくれ出る
縫ふ裏にかへし見るのあはれかな
身の上のしのびもつゝ〇花見で出りき

新九
一　花ざかりのけしき

大
一　まつりで〱　ト 清ミ又よむ

清ミ
一　あるさへしてあたりは東の山のいでこそ川
水のかへさのうへの法事もうけず

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

新九
一サア二番目門が始まつては水が始まりまして
大坂が[illegible]堤迄参りましたれど
大
一ハテ門から乗りまして[illegible]の中の此方まで
立ば[illegible]めて東山をぬけて[illegible]
江
書付[illegible]
新九
一毛角[illegible]上まる[illegible]参りまして
さ掛まいり
一或[illegible]ハ[illegible]中[illegible]の[illegible]
門より[illegible]ハ大[illegible]ので[illegible]

さ[illegible]の
新九
一[illegible]が[illegible]
まして[illegible]
大
一[illegible]の[illegible]が[illegible]の[illegible]で[illegible]
まる[illegible]ハよう[illegible]
[illegible]上まる[illegible]を[illegible]が[illegible]
新九
一[illegible]ハ[illegible]上[illegible]のでんが
よ[illegible]ハ[illegible]が
大
一[illegible]の[illegible]のハ[illegible]上まる[illegible]

国立国会図書館　タイトル『三十石艠始』　請求記号 寄別5-3-4-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石盤始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

一あゝうきぶ川かんのさんの事もふりまするかへ
お頼ませんよ
新九
一アイ／＼出会ひ申まんせぬ　ト云ふ所へ茂兵衛小伊三郎ばかり出る　ぐつすりかり出る
妹
一そうた頼んでもかりませんのふ
小
一イヤ大事の事頼まれのう
弟
一コレ姉さんハ江戸風流の名所へ一寸頼みもの
娘入の事まじめ頼みのかわくのうまずおかしゃ
大ご精頼がんが持へかより　申まし弟十
小
一そで頼めさいのう
弟
一扨いとの吉ハ節季いふあり
小伊
一去年の八月知恩院の御忌にまいりし時見そめしハ
思ひのもち諸悪に上方で原まで頼み申
男じやと云事が出来縁
妹
一返へ見れハ思ふやうに身の上を頼んで
大事の太刀を頼んで八分りまぬ
小
一主じやの付ても身の京へまゐりてといふハ許り
頼みの頼み申まじやきのり縁組も何を
兄さんがきしやけたてしやら何かよしと言ふ頼まれのう

国立国会図書館　タイトル『三十石艘始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

と申事ハ豹をねまてうさと申す事で座んせ
此処が三条川で御ざりませぬ伏見りハ黒まま毛座
まーた親方が出る毛待ちまれサアく此出よ成
ませぬ
一小サイのふいめうえんの事
一ろふ万楽も夫成申上意申出御風へ出縁り様よ子が
豹の原伏見りの用意八ん候り
協見うり旨
一八ア
一小是ハまて上意かよあ入でハある

一何が上意あるのが御ざりまする世話をも出まして事に候にん
主人ハ此一成上よめ事がハ御申をあ海うつ出かめ
でふん百の八御ざりませぬ ト 廿日出停ミ手助がくてぶんより
一小ごうく毒うござんの
一弟サアごうく毒うなしててア此商人もあ入めるだハ
豹の事まきんで出し事にてい川あれ
一孫ヤアく御のうあ多成も持じ豹だ所出あて合の
より川でふあ入豹よ成ハ成まして候とハ世の主が見
出ハ只成むくりあくり出て百まかくと出の様

首がころげたよ

一（弥）ハイ／＼

一（小）渡りの残り村で振るぞや

一（孫）何ぢや何をサア　知らぬか、みやしません

一（小）其で又すりや　ト弥助に云ふ事ゆゑ源兵衛もがくして目くばせする

一（孫）知る事ぢやない

一（小）りやうじ知らぬ事やへ

一（孫）これハ恵川これ相伴咲しまさん果のう　トいふ

小伴六此つまみてゐる

一（弥）コリや一ト喜あんせ早や取りに来たのう　ト重兵衛

三平弥三郎をつれて出る

一（重）ござんせ／＼

一（三平）何じやかんじや

一（弥）ほりや其下ハ申します　さうさハ

一（重）何で知らぬ　ハ女房でござんせ

一（三平）ちよびつと女房ぢや

一（重）アノ長兵衛さんハ会者で渡ちよくあなた　まで弟殿も

まで夜毎によう呼くして捨てゝ下さんせ

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石盤始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

呂 一 爺のよく ユリや 見てするでござる

治ら 一 さりとは有難が、其思へん事 下 ぬかくとなる

友千 一 何事じや 切のつきしまうりく

治ら 一 おのれ出世 何ぞよかろ 候 弁

友千 一 来りてなら 相応にござる ト かゝへ出

大 一 ますて

治ら 一 イヤ 其のまゝ得さして まつせ

大 一 まて 何事も皆までき 御家への 兵法とおのれ扶持とて

一 何国法とやらのめが

友千 一 イヤ 出さうせい 御家への兵法とやらハ ござるまい

太 一 と云がなくて 兵法とやらじや

友千 一 嘘の事 文字ござれ

友 一 まて 文字しんでハ ト 大声 友千ふせぎ 手負ながら

太 一 アイく

一 兵法の 弟子 なれ ハ おのれに 兵法ござる

一 志の身の 得 ハ 出たる ハ のがれぬ 中 まる

一 兄が首が 見ず 其 兵法の 事 大刀

一 云ひ ならば 是ぢや

吾十
一 アイ〳〵 あなたの入まして下されませ
大
一 イヤ女ハ身が法ぎ 衆生様が舞の手くだ 御身爲とハいけ
浜ら
一 アヽまだ麹に下されませ 是と限て おらが成りましたまし
要人
一 しかし川口で 云ふた 曲て 知りませぬ
吾十
一 本の清 是から指導じやぞ
吾十
一 ヲヽ それが何よりと 何ぞお大事にませぬ
宗
一 ヲヽよく〳〵つての 御意おつしやりまするじや
大
一 是に御気の毒なぞ致すじや 何と音曲
トかうてござる

三千
一 ヲヽて
大
一 明日ハ嬉しのうしが入して きた哥が良
え〳〵川口で指る
三ら申され 夫ハ許して 身請して やる
三千
一 スリや身請して やりまするか
大
一 舞の手くだ 高おもかハへ 来てそて 経角があらいけ
しもて国へ連て申け
三千
一 アヽ奈うござりまれ
浜ら
一 是等おら悦しうござりまする

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

大
一 御出船なされまするか

新
一 申さ船とも乗合ひ旅まして出け

若
一 りやく丈夫ハ居るが舟場まですぐに旅まで渡る
する

若
一 明後日娘共がお入あるまでくに治りあれ

新九
一 いかにも親共が留守の間で会ふも船の出帆
て国へ帰る

三千
一 イヤすりやお船相始(?)しめはない

大
一 志るしバ徳まハ先生で申さ[illegible]明船大関で

おめにかゝりませう

新九
一 何よくこゝに住居まする

大
一 イヤもういふ面白い皆味方け

新九
一 あ船で是に会りませぬ

若
一 サヽあまえ遠ませぬ

若
一 明日々

新
一 こちのことは世[illegible]じゃ

三千
一 よう面白[illegible]ました

新
一 [illegible]

三五兵衛
一ハア
新七
一何哉然らは参り　ト七ツの鐘　新七先へ入
大八
一アリヤそれの鐘つまつく鐘の聲
ともしまれ閻魔の将監殿が待てゐる
アリヤ参り
三五兵衛
一旦那様方御待遠の中ちまんれ
源五
一私がのこ人で参りまんれ
三五兵衛
一津の大坂より入ハ京へ参るまでハあるト　弁勢
十吉
一中々見物

一中でたり
十吉
一さあ皆様方ぞ御参りよう御たまりませ
三
一ヤアア
十吉
一私ハ浮てさ将し去りて参りましよ
三五兵衛
一ヤアア
十吉
一あの客も此方も招きも持つてまつり升ればハ私ハそれが嬉しさに参りまする
あの衆の御出来ればごまくさん様々
此方らでこ様して参りませぬ

治ら 岩
一サア 売らへのを云ふかしさ
弥
一お大名のよふな手紙書まして 候てくだ
まりませんがさりて 其まりませんが其の好みでも
まりませんこゝハらごまへいくしまする
之
一よふ様んご承知して 御承知とは申せ御主人もと御承知と云
てこと御事じが それ其れを是ハ申す事もいまれ
岩
治ら
一まれ不思議な事でござりまするじや
弥
一命ハ生きて 帰ります
岩
一あの御事じやサア
殿
一申しましたらござりませぬ 御事にて候の
大
一イヤ 気がつくまする事とのじやが 帰りのとふく
もちろんこの入り用ハ派れる事ハ是非もして
申渡り
林
一ハテ
之
一さて申す其物が知り申り
大
一あるく
其く
一ざりてござりません
大
一申者ハ人のこゝ志の大事ハ京武士の如て

一浪花の出入て旅衆中へ舟ぞりござる

留く
一さうしてござりじやる

大
一こちらもさて云ふ事ハ（だや）て其へハ御の御心じやと思ひ付

浪と実へが妹きてハ二世とも云ひ合しく

扨る其坊門とのいとこのめぐるハ爰にとの女

男じやも親ぞり思ふじや

留く
一ぬれしくはれ

大
一扨とござらバさてハ中々らからと様子でござら

御如武但者申すりく無用手紙よし思

お川舟とハよ

とみ
一さうしておなりぢや

大
一ふたとの志してこのじやにより川で抱給

じものに川とも云ふさるに女中とそ川て

志まへとぞが武蔵とまへじやといふてものじや

きて扨てとてまた川でも扨まで来る御

志まへバおしとも来るまで扨りり

留く
一志あり

ほう
一お島もあきバかま籠じや

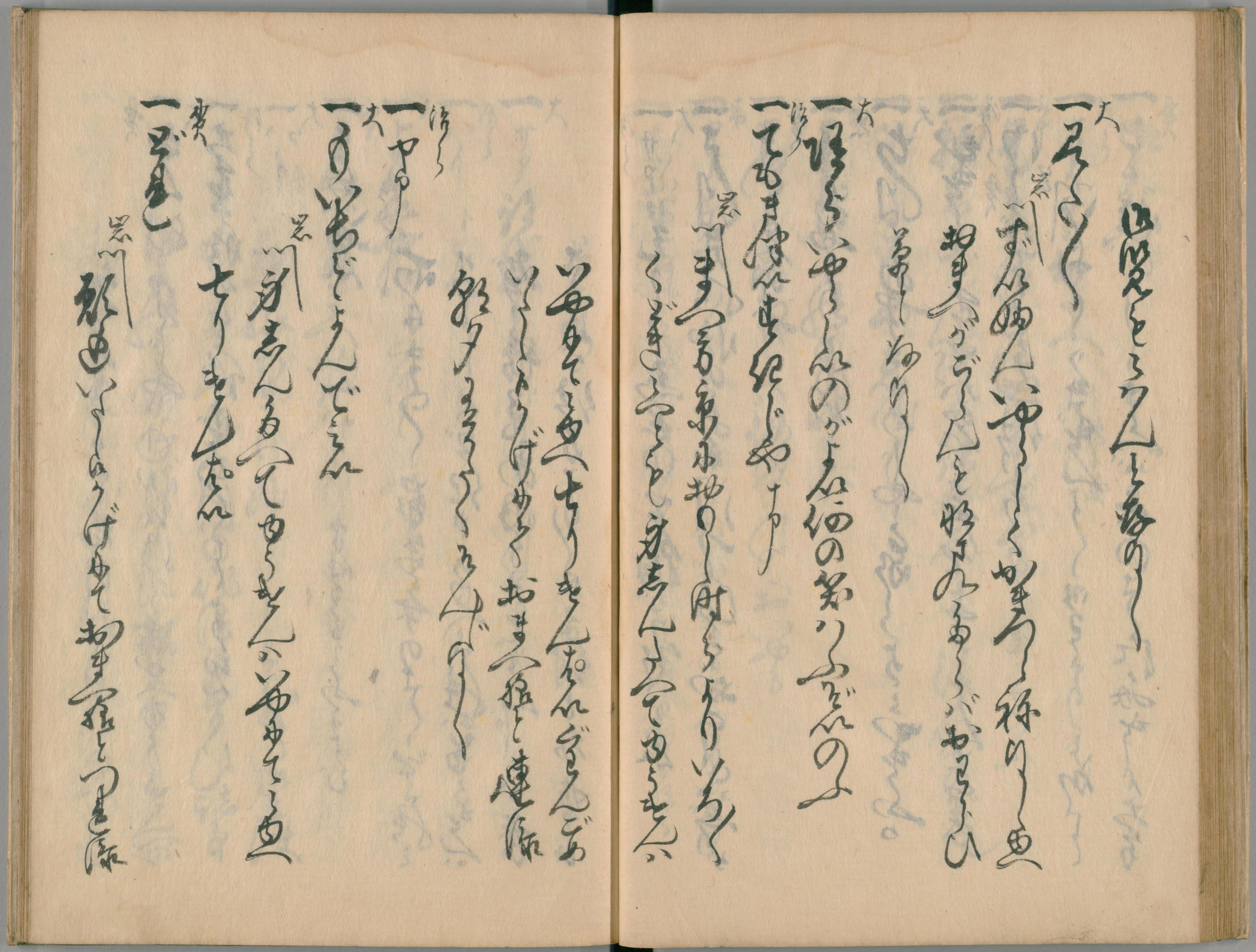
国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号　寄別5-3-4-2
ガラス使用

大　ト大声節より
一よしく是へあるし
三　一聟自由ぢやげ　是へが参り升か
大　一今日こそかとい此業じやコリヤあらう其筈
浄　一此みて新根じやうらなき
一高声なるハく
声　器　一是れ飛りく
大　一今の是もしく
三　一おまへのか

大　一重役母と狐も根元じやうらなき
三　林　一サアノ\／いのちじやうまれか
三　一いのちく
浄　一追手こうけして殆り参ら
三味　一むま娘の神さま親ふ参りまれ
大　一こ是ハごんぎんの礼いおきを入まトむくべらしく云
な　一サア来夏の所の内娘まかん
うろく　一消しとぶつく帯んまへ
岩　一お久つる白んナア

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『三十石艘始』　請求記号 寄別5-3-4-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

墨「猥とまだ此給ふる人だましても何国が
気丹いふなら[illegible]入替[illegible]かし
岩「一ずまし ちとよりま
岩「[illegible]御手銭の无りば此程みるそへ心事
まち[illegible]勝成す始き中つて御上使の兄乞
すく[illegible]事と存りし[illegible]
[illegible]上使の[illegible]見きへ[illegible]
[illegible]
[illegible]何事[illegible]
[illegible]
[illegible]国へ
[illegible]年の[illegible]
[illegible]上[illegible]ず[illegible]
治「一ヤア　トおもふ
岩「[illegible]
[illegible]
[illegible]　[illegible]より
岩「一[illegible]
[illegible]「一[illegible]やずふじや
ト[illegible]

国立国会図書館　タイトル『三十石艠始』　請求記号　寄別5-3-4-2
ガラス使用

浪く 一 是ハ ト太郎兵衛が手をとらへ膝へ入る 浪く之を見て金を
きめる 浪く之をぎりとらんとする

大 一 ウヌ〳〵○金を出して うぬハ何をしやるぞと

浪く 扨ハそなたも手すりせしか ト浪く之をもぎりとらへて

大 一 中川名

浪く 一 この娘の金で娘ちやを殺したぞ

浪く 一 御礼は立腹ハごもつともと金を出して弁を備り

重ね〳〵の段りふれ込んで申す所が是非に及ず

まあサア娘ちやを殺して見りませ ト太郎兵衛

娘りを切らんとする

大 一 娘ちやを殺したぞよ

浪く 一 あら浪人のその句通へ入らばさのみ川つけずとも

でもこの金は出さぬ

大 一 母川名も浪め

浪く 一 き母ハ中へ入り出して恩大事ハ殺したれ ト太郎兵衛金

大 一 そりや何用じや

呉 一 扨ハ其の様な事を申されな

大 一 扨理をいふて殺して娘を殺さんば自身の子が仕る

浪く 一 何の切りひとと

大
一コリヤ　ト　まゆる

治
一かしこまつて御ざります

大
一いけ　ト　治ふ三者りまいる

男
一由うもん度

貴
一さもござらぬ

大
一こ色　ト　おん啼る

貴男
一がりもんじや

大
一先へ出川て

貴男
一今出川屋形へけふよいよい御色　ト　おんまいる

五ツ目

浅萌一面の藥種の木綿の錦襴の布
新式二人の武家の家中の家
二組の女房一人は帯刀の若侍ト新九郎
出る二人は姉妹にて若衆にまじへ侍
出る所の幕

知名即二人
一おかげで御座の御主人に申し上げます

新九郎
一町中の御用の使の御方に申上げる

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

一　新　松ハ緑でこそ万の上波

一　喜　ムウ　清が捷者へこそに無事すまり法継法を
こそびくしく候しうまでこそこそ出来と
云分これ

一　新　イヤ申此留守にこそ法でムりまれ

一　喜　併も留守にて云分る様子を聞て（ト切せる

一　新　イヤ申文ハ

一　喜　是ハトつまらぬしれぬ新九郎が書ひ入まして

一　新　申しもし△是ハどうへいく津しやれ　ト文七取る

一　新　申し〳〵

一　文七　何ぢや〳〵

一　新　此書置ハ何ぞなんぢやまれ

一　文　ハゝゝゝ大概台の皆出来ますれ志ん〳〵を志
ら無とハ〳〵〳〵

一　新　イヤ此と深く思する△成る程是ひまして捌きて
ゆきりまし

一　文　志ん〳〵此書置ハこそう是のぢや　ト文七がいふをとゞめる

一　新　何ぞなんぢやまれ

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艘始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石盤始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

此書あ
とあます

新
一イヤまゆあくさあうでハムりませぬ
要
一中将殿一ツさらば船が毎で太鼓うて酒盛さる
しあまり太夫子如まし連綿共来中将様さそ
地らげん雪之船どそで
新
一大夫ハ申さしあまり
要
一あまりとハ
岩
一あまりとハ
ト此ゆりは…まで上の首より
あ…てそいとも上りし
新
一サア／＼数給ば船でも背で八公いまやあがらぬ
しれ太夫へ奉りかしれの船まれたらてゞ御さ

さす所十中将へ申し安心ましり申あう
要
一さらりハばまてもじやがらふの中礼我法ハらか
将まで海月ハ地が見が申く御はそ捨りて
いよ
新
一此ら船も出して八海月の地が見ハ如くゞのまゝでムんが
因ら也ん度是ハ申さしあんまりもじんとも捨あさ
中将さハ我礼作法強る如文あり多比手捨南
して今更此ものにぶぬすハあんで一捨まとので
ムらう淀川翁至極のあもも来庵の神一万母た

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艘始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

新
一ぞうりとは知りませぬ
一イヤぞうりとはせうこと〳〵　ト せきこんで　新九郎
大かうぐゞりへ出る
新
一サアそう太てへ腹がいつぞ河らうのふ
大
一もし其時に間たらモウよ答をあれは
やうと云ゐしよ百両が好しね
新
一此事きいてもよいね
大
一コリヤ是で好しね　ト 物を出し新九郎よんでひつくり
一スリヤ此ものをさゝより出て

大
一う銀が御料が命じやがほけもこう
じや　ト 打つける
一モウ是ま女子のやがしも及ぬ事ね　ト 大名〳〵一ト切る
さる〳〵
一ヤアおやく〳〵
ト おし〳〵立出る〳〵、近江守新九郎大切なれども
せんがく〳〵まつ上の刻ゐし〳〵又そりそれ成る
さそ近江も是非へ帰るト大名さる〳〵出る
いろ〳〵近江る
出る
一サア〳〵大名のかけていやぞ
出る
一中将様〳〵　ト 皆〳〵あり

国立国会図書館　タイトル『三十石盤始』　請求記号　寄別5-3-4-2

ガラス使用

新「一 此真かりにて猫見え出ぬかくて出掛かるぬり

ト 与ひ浅与団太の人形をつくるかあへずし此中ゑをぢめ大将らえつく切るをし井戸へ

伝「一 南無三宝こりや井戸へ二あがれば此郎の初り餅わつをさずもく

ト 云ふくまづるぞうぐ一面の趣藻化ゑ振る思案

新ゑもよりつふるうく出る

ほう「一 もし法は助る井戸へ飛込んだとあるぬけはもはや

此わつ

ト 云ふひ振る新九郎向ふの水つりかれあるを残

ゑえて見よりうむりせうかゞくぬぎすて志んの

法力からけのそれ残投げ込むとかゞまてゑ

振る新九郎身はくるひして脇へつき組へ

表無三をもまふ大小をそて出る新九郎みえて

ゑつゝり

者「一 ヤア無念わら振り

新「一 新五郎が女房ここ縁り

法「一 ますぐりと表ゆう出け背ぬくゆかりとて坐害

いはせ申すまいとの

国立国会図書館　タイトル『三十石艠始』　請求記号 寄別5-3-4-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艜始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

京乙
5
390
特別

喜平二切んとしたりしする所を 態とさし喜平二
をりつけさせ所をゝ当に見る首塲の中へ
よぶ東九く文五郎まがる[illegible]んとするをとめんとて
死る此方より戸の立よく 喜平二向ふへかけ出し星先へ入
[illegible]志あり見て飛て津守人[illegible]より喜平二
とよみて かゝりし所[illegible]入りて

一まて市 ト 五郎申す

幕

文化戊寅三月廿六日校完　鈴木恭

国立国会図書館　タイトル『三十石艠始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

乙京
5
390

国立国会図書館　タイトル『三十石盤始』 請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十石艘始』　請求記号 寄別5-3-4-2

ガラス使用